６／２『マリアとユダ』（ヨハネ１２：１～１１）

長谷川 望 牧師

＊*一方マリアは、純粋で非常に高価なナルドの香油を一リトラ取って、イエスの足に塗り、自分の髪でその足をぬぐった。家は香油の香りでいっぱいになった。弟子の一人で、イエスを裏切ろうとしていたイスカリオテのユダが言った。「どうして、この香油を三百デナリで売って、貧しい人々に施さなかったのか。」彼がこう言ったのは、貧しい人々のことを心にかけていたからではなく、彼が盗人で、*
金入れを預かりながら、そこに入っているものを盗んでいたからであった。（ヨハネ１２：３～６）

ナルドというのはヒマラヤ産の植物。その香油は、高価なもので、マリアはそれをイエスの足に塗った。イエスに対する献身を示すものであった。１リトラは３百数十グラム。３００デナリは今ではざっと３００万円。ユダのことばは本心ではなく、裏があった。ユダはイエスと１２弟子たちの会計係で、よくお金をごまかしていたのでこれで穴埋めをしようという魂胆であった。

＊*イエスは言われた。「そのままさせておきなさい。マリアは、わたしの葬りの日のために、それを取っておいたのです。貧しい人々は、いつもあなたがたと一緒にいますが、わたしはいつも一緒にいるわけではありません。」（１２：７～８）*

イエスはマリアを弁護し、その行為を賞賛される。ユダヤの葬りには強い香りの植物を用いる。イエスは、十字架の死が近いことを知り、マリアがしていることはわたしの葬りの準備である、といわれる。マリアもそのつもりで香油を塗っていたのだと思われる。他の福音書にも同じ内容の記事があるが、マタイ、マルコでは香油は主イエスの頭に注がれている。それは、イエスが「王の中の王」「預言者の中の予言者」「大祭司の中の大祭司」であることを表している。

＊*彼女は、自分にできることをしたのです。埋葬に備えて、わたしのからだに、前もって香油を塗ってくれました。まことに、あなたがたに言います。世界中どこでも、福音が宣べ伝えられるところでは、この人がしたことも、この人の記念として語られます。」（マルコ１４；８～９）*

マリアがしたことは、主の死を前にして、自分にできる精いっぱいのことであった。自分の身を、賜物を主にささげることによって主への愛をあらわし、信仰を表し、感謝を表したのである。「献身」である。私たちは何によって表すことできるのか、あらためて問うてみたい。マリアの「献身」は２千年たった今確かに私たちに伝わった。また、ユダのことも、こうならないようにという戒めとして伝わっている。主のことばは永遠である。香油の香りが部屋一杯に広がったように、教会が、そして私たちひとりひとりがキリストの香りを放つものでありたい。